

社会との回路に いかに接続させるか

藤崎 東京藝術大学とのおつきあいが始まったのは一昨年からになります。

僕は法政大学デザイン工学部でも非常勤講師をやっている、大学院のシステムデザイン研究科（現・デザイン工学研究科）で「美学・意匠論」という講座を持っています。僕はもともとデザイン雑誌の編集者ですので、学生が雑誌をつくっていく過程のなかで「デザインとは何か」を考えてもらうことができないかと考えてフリーペーパーをつくることにしたのです。

ですが、法政のシステムデザイン研究科は、理系でしかもプロダクトデザインとエンジニアリングとマネジメントを横断する教育をしているものですから、グラフィック系が弱いんです。そこで、藝大デザイン科の松下計先生にデザインの監修をしていただけないかとコンタクトをとったんですね。それで法政と藝大でコラボレーションして、企画編集は法政の院生、デザインは藝大デザイン科の院生が手掛けるということになり、そこからつながりが生まれました。それが『DAGODA』という雑誌なんです。この雑誌を始めてから、藝大の雰囲気にも少しずつ触れるようになっていったんです。

藝大のデザイン科といえば、キャラクターが立ち、個性あふれる仕事をするデザイナーを数多く輩出してきているところです。一方で、デザインというのは、企業や社会のシステムの一部として、自分の名前が出てこないことに美学を感じるところがあります。そのあたりバランスが大学内でどうなっているのか、裏方的な人材を輩出する教育機関としての器の大きさは実際にどうなのか、これから知ることができるのではないかと期待しています。

福中 私のほうはこれまで講師として出講したこともなく、今年からが本当に初めてですが、藝大に対して、とくにこうであるというイメージはありませんでした。ただ、日本の音楽研究の中心に位置している、という認識は、もちろん持っていました。

ここに来てまだ数か月ですが、学生はとも真摯に自分の研究対象に向き合っていると思いますし、私自身、学生たちからとてもよい刺激を受けています。しかし、これは藝大生に限ったことではないと思いますが、いまの学生はいろいろな意味で、「外」との繋がりを意識的に考える機会がとて少ないと思いますね。

たとえば、私は論文の執筆のためにしばらくヨーロッパに滞在したことがあるのですが、日本人音楽家がこれだけ世界で活躍している時代とはいえ、日本人研究者が西洋音楽史を学ぶということは、まだまだ「当然な事」ではありません。つまり日本人である我々がなぜ西洋音楽史を対象に研究活動をしているのか、その理由づけとか文脈をきちんと説明できることが求められる。そういった意味での筋肉は研究者にとつて必要だと思うのですが、藝大の学生たちはまだまだ学外というか、社会から揉まれていないなという印象を受けることがあります。

さらに、音楽という芸術は、人間が社会での営みをしてきたうえで生まれてきたものですが、どんな曲にも、その時代のその場所で成立したという理由があるわけです。そういった前提を理解することによって、研究の幅や、それを発信するときにいつてくる結果が変わってくると思っています。

藤崎 藝大には、物をつくるという面ではとても高い技術を持った人たちが入ってきますが、学生にはまだそのスキルを社会と接続させる回路がありません。形をつくれるというの



第13回 教員は語る

美術学部デザイン科 准教授

藤崎 圭一郎

福中 冬子

音楽学部楽理科 准教授

藝大への期待・抱負・提言



は、フィニッシュを決められるということですね。マーケットやコスト、技術的な制約や安全や環境への配慮などを考えて、最終的な製品の形を提案する。それは、サッカーに例えれば「フォワード（FW）」の役割です。学生は豪快なシュートを決められる技量を持っているわけですから、教員の役目は、社会というフィールドで点を決められるFWを育てることになります。決定力のあるFWが不足しているのはサッカーだけの問題じゃないですよ。しかし、モダンサッカーで試合に勝つためには、シュートがうまくいだけではダメです。FWもちゃんと走って守備もするチームプレイが必要なんです。ただ前に張って自分のスタイルで蹴っているだけでは得点は入りません。ちゃんとオフサイドのことも学んでほしい（笑）。

デザインは本来、世界の人たちが豊かに暮らせるようになるための技術としてあるべきものなので、僕は社会と繋がる道を敷いていきたいと思っています。でもやはり藝大はFWを育てるところで、DFやMFを育てるところではないですね（笑）。

福中 一般論として、なにごとでも汗をかいで勉強し、人と張り合って獲得したものでない、自分の身にはつかないと思うのです。ところが、現在の日本の消費文化は十代や二十代ばかりに目を向けているものですから、彼らはずっとちやほやされてきて、自分たちが社会の中心だと勘違いしているというところがあるのかもしれない。そしてあえて、その輪のなかから出て、ほんとうに自分がやりたい事、やるべき事をやる、という機会が減ってきているような気がします。やわな意味での自分探しはするけれども、自分の守備範囲にないことをあえてやるという気概がな

い。だから、やりたいことだけなんとなくやるという、甘えの文化がはびこっているような気がするんですね。

藤崎 私も同感です。環境や時代はどんどん移り変わっていくのに、成功体験を引きずりすぎている気がします。学生のうちはいろいろなことができるのだから、もっと成功体験を捨てて挑戦してほしい。僕はジャーナリストでもあるので、手で考えるだけでなく、足で考えることの大切さを伝えていきたい。直接人に会って話を聞くと人と違った話が聞ける。インターネットでは、みんな同じ情報になってしまっています。

領野を超えてアピールする 現代音楽

藤崎 福中先生がレクチャーをされた「藝大21 創造の杜 ヤニス・クセナキスー音の建築家―」（四月二十二日・東京藝術大学奏楽堂）を聴きに行っていたんです。

僕がクセナキスのことが気になっていたのは、ル・コルビュジエとの関係からでした。クセナキスは作曲家として有名になる以前に、コルビュジエの下で「ラ・トゥーレット修道院」（一九六〇年）の設計を担当しました。「ラ・トゥーレット」には「光の波動面（オンジュラトワール）」と呼ばれる「あみだくじ」状の窓割りがあって、あのデザインとクセナキスの音楽がどのようにつながるのか関心を持っていたのです。それが先生のお話とクセナキスのなんて言っているのか、非常に身体的な音楽を聴いて、その深いつながりが裏づけられた気がしました。

コルビュジエとの関連性でいえば、「モデュロール」との結びつきも感じました。人間の身体と黄金比に基づいた建築概念ですが、科



福中冬子他編『オペラ学の地平——総合舞台芸術への学際的アプローチⅡ』（彩流社）



中：藤崎圭一郎著『デザインするな』（DNP アートコミュニケーションズクリエイティブ）

左右：フリーペーパー「DAGODA」

福中冬子（ふくなか・ふゆこ）
音楽学部楽理科——准教授
一九九二年国立音楽大学器楽学科「ピアノ専攻」卒業。
一九九五年私立ニューヨーク大学人文大学院入学。
二〇〇一年～〇三年同非常勤講師。
二〇〇三年同博士課程修了（Ph.D.）。
二〇〇六年慶應大学非常勤講師。
二〇〇八年明治学院大学非常勤講師。
二〇一〇年より現職。

共著に『オペラ学の地平』（彩流社）がある。

藤崎圭一郎（ふじさき・けいいちろう）
美術学部デザイン科——准教授
一九六三年横浜生まれ。
一九八六年上智大学外国語学部ドイツ語学科卒業。
一九八六年美術出版社入社。
九〇～九二年『デザインの現場』編集長を務める。
一九九三年より独立。
一九九三年金沢美術工芸大学非常勤講師。
二〇〇三年桑沢デザイン研究所非常勤講師。
二〇〇四年法政大学デザイン工学部兼任講師。
二〇〇五年法政大学大学院システムデザイン研究科兼任講師。
二〇一〇年より現職
著書に『デザインするな』（DNP アートコミュニケーションズ）、
共著に『建築と植物』（MAX出版）、
『グラフィック・デザイナーの仕事』（平凡社）。

学的で数学的な手法を用いながら、非常に人間的で有機的なものです。そういうところがクセナキスの身体的な行為による演奏や有機的な作風とリンクするのではないのでしょうか。

福中 あの日コンサートは、現代音楽の巨匠を毎回ひとりずつ紹介するシリーズ（「創造の杜」の一環で、今年はクセナキスのオーケストラ作品をプログラムにしたものでした。クセナキスの室内楽は聴く機会はあるものの管弦楽曲は編成が大きいし、演奏が難しいとされています。ですから、藝大はとても冒険的な試みをしたことになります。

クセナキスの曲は、藤崎先生からご指摘いただいたように、まさに身体的な音楽で、ライブでないとはんとうのよさがわからないものなんです。現代音楽のコンサートは比較的集客が厳しいのですが、あの日は多くの方に足を運んでいただき、嬉しく思っています。クセナキスの音楽という珍しさもありましたし、建築やデザインに興味がある方も足を運んでくださったのかもしれないですね。

人と人をつなげる「ハブ」としての役割

福中 クセナキスのコンサートがまさにそうですが、研究と演奏をリンクさせた催しを試みていきたいですね。すでに演奏芸術センタ―の松下先生や大石先生が中心になってやっていらつしやいますけれども、藝大が持っている音楽的コンテンツのすばらしさを、子供たちに伝えるような活動は非常に意義があります。音楽は単純に楽しむだけではなくて、考える対象でもあるのだということに気づいてもらえらるような催しを、どんどん外に向けてやっていきたいです。さらに、たとえばオペラ作品に映像も取り入れるといったように、マルチメディア

的な発想のコンサートに取り組むことも、個人的にはこれからの課題だと思っています。

藤崎 僕はデザインジャーナリストなどと名乗ることもありますが、基本は編集者なんです。編集者の大きな仕事は、人と人をつなげることだと自分では思っていますので、せっかく藝大に来たんだから、人と人を繋げる「ハブ」みたいな場をつくっていかたいと思っています。学外からいろいろな人が藝大に集まり、さまざまな議論ができるような場にしていきます。もちろん、日本だけではなくて、世界中の人たちが集えるような場所です。なにかイベントをやりたいというとき「藝大でやるのがいいんじゃない」と自然に会話に出てくるようになってくれれば、すごくいいと思いますね。

